

シンポジウム

フィールドでの<声>をどのように聞くのか？

—「加工」以前の現場研究覚え書き—

草 山 太 郎

(大阪体育大学短期大学部専任講師)

宮 内 洋

(札幌国際大学専任講師)

コメンテーター 岡 本 拓 子

(美作大学短期大学部専任講師)

コメンテーター 尾 見 康 博

(山梨大学助教授)

司会 齋 藤 久 美 子

(お茶の水女子大学博士課程後期課程)

企画 サ ト ウ タ ツ ヤ

(立命館大学人間科学研究所専任研究員(文学部助教授))

齋藤 本日は、多数の方にご参加いただきありがとうございます。私は司会を務めますお茶の水女子大学の齋藤久美子と申します。よろしく申し上げます。ではただいまより「コアプロジェクト研究会 対人援助の理論・方法・歴史」の企画により、**「フィールドでの<声>をどのように聞くのか？—「加工」以前の現場研究覚え書き—**」を開催いたします。まずは、企画のサトウタツヤさんから一言お願いし

ます。

サトウ 本日は、「コアプロジェクト研究会 対人援助の理論・方法・歴史の企画」で、講演とシンポジウムを行っています。このシンポジウムは、企画全体の後半にあたりまして「フィールドでの<声>をどのように聞くのか？ —「加工」以前の現場研究覚え書き—」というタイトルで草山太郎さんと宮内洋さんにご報告いただきます。

齋藤 では、最初に草山太郎さんからお願いします。

草山 はじめまして。草山太郎と言います。現在、大阪体育大学短期大学部教員をしております。あとでご報告される宮内先生とは面識はなかったのですが、論文を読ませていただくということを通じて、これまで間接的にバネにさせていただいていましたので、今回のイベントのことを知って、一参加者として出席したいということでやってまいりました。今日は、「フィールドの声を聞く、私とは誰か」というテーマで報告をする予定ですが、看板に偽りありと非難されそうな内容になるか

もしれませんが、お許ください。

いま、私はいちおう研究者して活動していますが、まさか研究者になるとは学部時代思っていなくて、「研究なんかしようもない。俺は現場でバリバリ体育教師をするねん」と思っていました。なぜここにいるのだろう、なぜ研究をしているのだろうというところが一つの自分のテーマになっています。

さて、さきほど宮内さんの論文を読むことでバネにさせていただいていた、といいましたが、その一つは、「外国籍園児のカテゴリー化実践」（山田富秋・好



草山 太郎 氏

井裕明編『エスノメソドロジーの想像力』，せりか書房，1998年）という論文でした。私は、大学から大学院、研究者というルート来らずに、あちこちふらふらして、現場の教員、フリーライターなんかもやっていて、その後、大学院の修士課程を修了したのですが、論文というものを読むたびに、「これから研究者なんかやっていけるのだろうか」と不安に思っていたところ、この宮内さんの論文に出会いまして、「こらいける！こんなももありか…」と思ったんです。宮内さんは、自分の立場、フィールド、現場における関係を常に自問し、「自分はどのような立場にあるか」を徹底して突き詰め、それを論文ではっきり表明されています。ある論文では「僕は客観的な立場に立たない。AさんとBさんがいたら、Bさんとのつきあいが長い。それならBさんの立場に立つ。それが正義だと思っている」ということを前提に語るというところまで書かれていて、「これはすごいな」と思いました。あと、宮内論文は書き方が私小説風で、戸惑いや、ぐっちゃらと揺れているものを表現している。ほんとにと勇気づけられました。

あともう一つ、宮内さんの書かれたものでもう一つパネにさせてもらったのは、「あなたがセックスケアをしない理由」（好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』，せりか書房，2000年）という論文です。障害者に対するセックスケアについて、当時、彼が教えていた学生にアンケートをとったデータをもとに書かれた論文なのですが、掲載された本の表紙にこのテーマが書かれていたのを見て、「やられた」と思いましたね。私も同じようなテーマで聞き取りを考えていたので、僕にとっては、幸い宮内論文は批判的にとらえることのできるものだったので、「これじゃいかん」と論文を書かせてもらいました。

さて、今日のテーマが、「フィールドの〈声〉を聞く「私」とは誰か？」ということですので、僕の自己紹介をさせていただきます。簡単ではありますが、いまから話をする草山太郎というのはどんなやつなんだ、ということで。

ぼくは大阪府の公立の中学を卒業し、高校は体育科に進みました。中学校から大学まで野球をしていました。某体育大学で、巨人の上原君が後輩です。僕は彼のことをよく知っていますが、彼は僕のことを知りません。大学卒業時に、偶然運よく大阪府公立学校の教員試験に合格しまして、養護学校に4年、聾学校1年、勤務しました。「体育教育を変えてやる」と意気込んで、学校現場に出たんですが、なか

なと思うようにいかなかったんです。また、聾学校の時、教員しながら役者もやっていた。その後、思うところがあって教員を退職。フリーライター兼アングラ系小劇団員兼無認可作業所指導員兼主夫をやりました。でも、障害者の父に育てられたぼくは、障害者のことから離れれば離れるほど戻りたくなくて、大学院で障害児教育を専攻して、今の仕事にたどり着きました。

さて、僕が初めて質的調査をもとにして書いたのは、「障害者のマスタベーション介助について——介助者の聞き取り調査から」（『大阪ソーシャルサービス研究』，大阪体育大学短期大学部ソーシャルサービス研究所，創刊号，2001年）という論文です。さきほどもちらっとお話ししたように、この論文は宮内論文への批判から始めたわけ。障害者のセクシュアリティに関して20年以上前から語られてきたのですが、その中に、障害者のマスタベーションに関することも入っていて、それに対するケアを考えなければならぬなどと言われていながら、あまり考えられてこなかったんです。また、議論されたとしても、マスタベーション介助を「すべきか、すべきでないか」という感じでした。そこで、その是非を論じる前に、まずはマスタベーション介助に対する意味づけをきちっとやる必要があるのではないか、ということでこのようなテーマを設定しました。

これを日本社会福祉学会で報告したときに、「障害者自身への聞き取りはしないのか？」と聞かれました。じつは、当初の研究計画では、まずはじめに障害者にマスタベーション介助に関する話を聞こうと思ったんですが、巷では「あの人はやっている、この人も受けている」と話を聞くんですが、実際に誰だと特定しようとする時間がかってしまって聞き取りの対象者が出てこない。さらに、宮内論文も出たこともあり、まずは介助者に話を聞いてまとめてみようと思ったんです。また、その報告の時、「私は施設の職員です。あなたは現場でそういう時、マスタベーション介助をすべきだと思いますか、しない方がいいと思いますか？」と、予想通り聞かれました。それに対する僕の答えは、「僕自身はどちらも考えていない。考えるべきではないだろう。僕自身が、マスタベーション介助をすべき/すべきではない、と、どちらかの立場に立っていたら、この論文はできていない。なぜならば、ぼくの考える立場の方に結論をもっていってしまうから。できていたとしても全然違ったものになるだろう。この研究が、マスタベーション介助について考える現場

の人の資料となってくれればと思っています」と答えました。と言う感じで、この研究では、あまり結論的に「こうだ」と言っていない。なんとなくぐちゃぐちゃと終わったんです。質的研究というのはそういう傾向があるのではないかという気がします。量的に数字等ではっきり示して「こっちが大きい」というのではなく、質的研究は「何となくこんな感じかな」と意味というものをめぐる話をしていくので、わかりにくいと言えばわかりにくいかもしれません。ただ、ぼく自身は、質的研究は、明確に「結果」が出ないから面白い、という感じでやっています。

また、この質的研究のデビュー作であるマスタベーション介助論文の時に思ったのが、当然と言えば当然なのですが、なにをテーマにし、どのようなことを明らかにしたいかによって研究方法が決められるということです。最近の質的調査関係のメーリングリストの書き込みを見ていると、「質的研究は簡単。インタビューを行ってデータを集める。それを分析すればいい」という感じで、けっこう安易に質的研究に取り組もうとされている人がおられるような気がします。もちろん、一つの研究方法として質的研究の技法を学ぶのはいいとは思いますが。とくに、質的研究の存在意義は、内容的にもほとんど語られてこなかったことや、語りはあるが研究として採り上げてこられなかったものを研究対象とし、語りを掘り起こしていたり、それを記述することにもあると思うので、そのあたりをきちっと考えた上でこの研究方法を採用して欲しいと思っています。

インタビュー、聞き取り調査という行為は、単に、日本語をしゃべる人に日本語をしゃべる人が話をするから成立するものではないと思っています。というのも、最近、ある方から相談を受けたんです。「私も質的研究をしたい。インタビューをするために話を聞きに行きたい」。じつは、その人は、メールでは流暢なコミュニケーションがとれるけれども、リアルでのコミュニケーションが苦手な人なんです。インタビューという行為は、日本語を使って話ができるということだけで可能なのではなく、より個人的な要素、たとえば他者とコミュニケーションをとる能力というようなこともかかわってくると思います。逆に僕のようにインタビューに慣れてしまうのは怖い部分もあるんです。そういうことも考えていく必要があるでしょう。人の話を聞く。人の話はぐちゃぐちゃです。まとまっていない。矛盾している。一貫性がない。さっき、ああいったかと思うと、次はこう言っている。話自体がわか

らない。そういう話を聞くことができる。いろんな人のいろんな話を、どんなぐちゃぐちゃしていようと、透明ですきっとしていなからうが、話を聞くのが好き、嫌いではないということも、インタビューをする際の重要なファクターとしてあると思っています。もちろん、聞き上手な人のみができる職人芸とは思ってはいないのですが。

次に、質的調査を使った論文の第2作目、「語りたいこと」と「語らせたいこと」—インタビューにおける言語障害者との相互行為について」（『大阪体育大学短期大学部紀要』，第4号，2003年）についてです。これは名古屋大学の太谷先生の質的研究のメーリングリストに「こんなん書きました」と紹介させてもらった、いろんな反響がありました。その中に、立命の院生である伊藤さんがおられて、ちょうど宮内さんもこられるので、いっしょに話を聞きたいと言っていたわけですね。この論文は、マスタベーション介助の話を障害者に聞きにいった時の話、といっても話の内容そのものを使ったのではなく、インタビューの際のその障害者とぼくとの会話について検討したものです。

もともとは、マスタベーション介助論文の続編、つまり、「マスタベーション介助の介助者側からの意味づけを障害者側から聞いていこう」と。そして、その間にあるずれ、共通点、新しいテーマも見つかるのではないかと、聞き取り調査に行ったわけですね。そこで障害者から話を2時間ほど聞いたのですが、これがめちゃめちゃ面白かった。でも、帰り道、何か釈然としないものを感じたんですね。なんかもやもやと残っている。こんな経験は初めてだ。「なんでだろう?」と考えてみた。彼は、脳性マヒで身体障害者手帳1級で、発話障害（論文では、「言語障害者」と書いたんですが、太谷先生からさりげなく「発話障害だ」とコメントをいただきました）を持っている男性です。マヒがあって発話が流暢にいかない。ある方から彼を紹介してもらって電話でアポをとった時、話が全くわからなかった。ヤバイと思いましたので、事前に正式に研究の目的を話すことと、発話が理解できるか、ということを確認しに彼の家に行きました。その結果、曖昧な言葉は確認し、聞き取れなかった言葉は聞き直すという方法で理解できると、その時は思ってインタビューを実施したんです。しかし、インタビューが終わった後、もやもやしている。それはもしかしたら、ぼくがよかれとおもって採用した、確認、聞き直しと言う行為が、

彼の語りを抑圧したり誘導しているのではないか。僕の中ではそういうことがあれば、この話の内容自体は研究に使えるだろう。それ以前に、僕が感じたもやもやを明らかにすることが必要だろうと考えました。

そこで、録音テープを聞きなおしながら、トランスクリプトを追って見たんです。そしたら、ぼくが予想していたような誘導とか抑圧な部分もあったんですが、それだけではなく、彼がぼくの関心によって切断された文脈を修復しようとしていたり、ぼくがぼくの関心から聞き出そうとしたことをやりすぎし、彼自身の語りたいことを語ろうとしている、ということが見えてきたのです。ただ、単にぼくが権力を行使するという一方的な関係ではなく、彼からも反撃してきている。

このようなことに気がつくことができたのは、ぼくが、「聞く - 聞かれる」という関係は対等ではないと、認識していたからだと思っています。

技法的には、いわゆる半構造化面接、ということで行ったんですが、聞きたいこと、あるいは、考えたいことがあるのはぼくのほうであって、彼のほうは、聞かれたことについて語るだけなんです。だとすると、これは決して対等な関係なんかではなく、非対称ですよ。それで、ぼくは、てっきり、ぼくが主導権を握って話をすすめていた、だから、しっかりこなかったんだ、と思い込んでたのですが、じつは、それだけじゃなかった。発話障害ならではの短いセンテンスを駆使して、したたかに、ぼくが「語らせたいこと」と思っていることを語らず、彼自身が「語りたいこと」を語ろうとしていたんです。

あと、この論文でぼくが「おわりに」で記した「有効打」という言葉についてですが、大谷先生、そして、今日の指定討論者の岡本先生は、ぼく以上に納得、理解してくれて、書いた本人はびっくりしています。というのも、この言葉は、ぼくの分析から明確に出てきた概念というよりも、「なんかこんな感じかな？」ってものを、とりあえず言葉で表現してみよう、というものだったんです。

さて、最後になりますが、僕自身、健常者である僕が障害者のことを研究する際に意識していることは何か、障害者にインタビューする際にどういうことに留意して聞いているか、ということについてお話しさせていただきます。

まず、ぼくは、話を聞く時に相手と同じに立るという幻想は持たないようにしています。よく、障害者のことを理解するために相手と同じ立場に立つべきだと言

いますが、全く反対だと思っています。そんなの立てるわけがない。たとえば、僕の親友に盲人がいます。果てしなく全盲に近い弱視です。彼と僕は大阪で生まれ育った同い年です。さらに同じ大阪文化も共有している。しかし、彼と僕は違います。僕は見える世界、彼は見えない世界で生きてきた。同じ立場に立てるわけがないですよ。それならば、障害者の立場を理解しなくてもいいのか、と言われると、そうではない。ただ、理解するためには、まずはそこに「違い」があることを認識することが必要だと思うのです。そのような違いを認識していないと、何が問題か、何をどう考えればいいのかなどが見えてこないと思うのです。

次に、聞き取りに関してですが、実体としての「声」があると勘違いをしないように気を付けています。たとえば、僕がマスタベーション介助を受けているAさんから聞いた話は、あくまでAさんと研究者である草山太郎の関係で生まれた語りですよ。自治体の福祉課の職員がサービスを提供しようとして、「マスタベーション介助したくないですか？」と聞く、あるいは、「セクシュアリティのことで困ってないですか？」と聞いたら、当然答えは変わってきます。それは、自治体の職員と研究者という立場の違いからくるものですよ。だから、ぼくが聞いた話は、あくまでも、研究者としての僕にAさんが語った話だということです。このように、「語り」に限定をつけることは重要だと思います。間違っても、Aさんの中に語りが初めからあって、それをインタビュアーが引き出すのではなく、インタビュアーとインタビューーとの関係の中から語りが生まれてくる、同じ主題でも、関係が変われば違った語りが生み出されてくる、ということ認識しないといけないと思っています。

最後に、広い意味での「当事者性」を持つ、ということです。これは、「最後は自分の問題にはねかえってくる」という認識です。たとえば、ぼくは「障害者のセクシュアリティ」を研究テーマの一つにしていますが、それは、「障害者のセクシュアリティを考える」という部分もなくてはならないかもしれませんが、最終的には、そのテーマについて考えることをとおして、健常者の、あるいは、健常者である「自分」のセクシュアリティを問う、という作業だと思っています。

ということで、はじめに予想したとおり、まとまりのない話になってしまい申し訳ありませんでした。僕が語っていないこと、皆さんが語らせたいことがありまし

たら、何なりとお聞きください。ご静聴、ありがとうございました。

斎藤 ありがとうございました。では、ご質問のある方はどうぞよろしくお願ひします。

質問 障害者と健常者の線の引かれ方ですが、セクシュアリティの関係で引かれたのか、別の定義でのカテゴリーですか？ セクシュアリティの意味での障害者なのかと思ったんですが。

草山 一般的にとらえられている障害者、健常者です。

質問 マスタベーションについて可能な者は障害者に含めないんですか？

草山 障害者の中でマスタベーションができない人と、この場合は設定しています。

斎藤 ありがとうございました。では、続きまして、宮内さん、ご報告お願ひします。

宮内 札幌からまいりました宮内洋です。草山さんにほめ殺されたようで。今回のシンポジウムは新しい興味深い試みがされています。掲示板での議論の続行も面白いと思います。もう一つ、さりげなく、面白い試みもしています。今回のタイトルは僕自身が決めたもので、草山さんとメールで話し合っていたのは「フィールドに佇む私」でした。より鮮明にするために今回のタイトルにしました。今回の全体のテーマはメーリングリストにも出されていきました。しかし一人ひとりの個別報告のタイトルは出ていません。今回、草山さんのタイトルは今回のレジюмеで明らかになった。今、初めて知ったわけです。僕のタイトルは誰も知らない。これは結構、面白いことです。心理学や科学ではまず先に「タイトルありき」だと思うんですね。テーマに興味を持って聞きに行く場合が多いんだと思います。個別のタイトルがないにもかかわらず、皆さんはなぜいらっしゃっているのか、一人ひとりに教えてい



宮内 洋氏

ただきたいなと思います。フィールドワーカー魂が燃えてお聞きしたいんですが。「友人に誘われて仕方なくきた」「外が暑いので涼を求めて来た」「タイトルを見て面白そうなので何かが始まると思ってきた」「登壇者の顔を見たかった」等々。

このシンポジウムの記録をどこまで載せるかも面白いところです。実は私たち二人の関係がシンポジウムでクローズアップされています。だからこの点はカットできないわけです。しかし、どうなる

かわかりません。何をカットするか、何をカットしないのかは恣意的な問題です。エスノメソドロジーの会話分析のように、すべて全部きっちりと言いよみや沈黙まで明示化する、文字化するというやり方があります。それも実は破綻しているという話は後からしようと思いますが。文字化したとしても全部できればいいですが、今回のシンポジウムは紙幅の制約があるでしょうから全部文字化することはできないわけですね。何を省略するか、何をカットするか、何を活かすのか、かなり恣意的です。こういう場も権力的な力が働いて、僕の話が全部消されてしまう。僕はパネリストにいなかったという話になるとか。実際にそういうことはよくあるわけです、歴史の場では。いたにもかかわらず、いなかったことにされてしまうことはよくあります。

さて、ここにいらっしゃった方々は「登壇者の顔を見たかった」「話を聴きたかった」「草山さんの論文を読んで質問をぶつけたかった」という思いで来られている人がいらっしゃるかなと思います。報告内容ではなく、報告者そのものへの関心で来られている方も何割かいらっしゃると思います。これは以前の心理学ではとても考えられないような不思議な現象であるわけです。結果とかデータ、内容を聞きたいのではなく、その人が何をしゃべるのか、何をしゃべろうとするのかに関心があるというのは、心理学とか科学と名のつくものにおいては、不思議な面白い現象

だという気がします。

サトウタツヤさんの前で心理学の歴史を語ろうという恐ろしいことをしようとしているんですが、簡単に言うと、心理学は出自が呪術だったりするところもある。そうすると「心理学は科学だ」と思っている方からすると「出自を隠そう」と過剰に科学的になってしまう側面があるかと思います。これまでは過剰な科学主義がおおいかぶさっていたのではないかと思います。それが薄らいできて「フィールド心理学」「質的研究」が少しずつ出てきたのかなと思います。科学の領域では、自らの表記は「一人称複数形」です。つまり「私たち」です。論文は基本的に「私たち」で書かなければならないわけです。対象は人間であれば三人称でなければならない。ましてや「一人称単数形」で自分のことを書きながら「二人称」で語るのは御法度でやってはだめだ、論文ではありえない。これがこれまでの心理学の領域での話だったように思います。

「一人称複数形」で語っていく。その前提として、「私たち」という一枚岩の研究者集団がある。科学の進歩のため、人間が前進していくため、ほとんどの場合は自分の出世のためですが、「科学の進歩のために個人の固有名詞は出してはいけない」という掟があったのではないかと思います。「一人称複数形」の前提のもとに進んできたわけです。中には固有名詞を名乗るのを許された人もいます。その人はビッグネームです。その分野においてビッグネームの人は研究会や学会などで自分の固有名詞で語る。その人の固有名詞だけで人が集まる。そういう状況があります。フィールドワークということが市民権を得た現在、「一人称複数形」というのは破綻しています。僕自身も「私たち」という論文を書いたことはあまりないです。自分は一人なのに「私たち」という表記は変なんですね。使ったことがない人間が、アカデミックポストを得ているのは不思議なことで、以前なら考えられなかったかもしれません。僕はいま心理学科の教員ですが、心理学科の教員でカウンセリングをしていた人以外の人間が「私たち」という言葉を使わずにポストを得ることはかなり珍しいことではないでしょうか。それだけフィールドワークは市民権を得たのかなという気がするんですが。

「私たち」という一人称複数形が破綻している一例をお話したいと思います。エスノメソドロジー、僕はエスノメソドロジーを方法論として論文を書いてきました。

後輩には「^え似^せ非^ひノメソドロジスト」と言われていますけど（笑）。エスノメソドロジーは厳密であると言われてます。この中でも会話分析を実際された方もいると思います。僕も会話分析をして、「沈黙0・何秒」とカウントしてやっています。僕の論文ではなく、ある人の論文です。ある共同作業所での出来事をエスノメソドロジーという手法を用いて分析した論文です。エスノメソドロジーは極めて厳密で微細な方法論という言い方も可能だと思います。自然科学と親和性がある。一部科学的な部分、認知科学と手を結んでいる部分もある。精緻にエスノメソドロジー的に記述された論文があるんですが、果たして、その場の正確な記述なのかという大きな問題があります。

実際にその論文は共同作業所における朝のホームルームのやりとりを細かく、誰がどの方向を向いたかまで執拗に、エスノメソドロジー的に記述したものです。これ以上厳密はないじゃないかというくらいです。筑波大学の好井裕明先生がその論文を批判しています。僕の言葉で言えば、「厳密になされているが、本当に厳密なの？」と。ほんの些細に肩を動かすだけでも、どっちに肩を動かしているか。ある人に向けた注意を向けたために動かしたのか、単に体が揺れたのか。知的障害者の人で自分の体を制御できない場合があります。制御できない場合はどのように見なすのでしょうか。論文を書いた方は、別の論文で告白されています。「トランスクリプトを作成する上で、こうした音声（注：重度の障害のために聞き取りづらい発話）をどのように扱うかは重要な問題であるが、今回は、訪問者である私にとって発話として聞き取れると判断されたもののみを、書き起こしてある」と。この点に関して皆さんどのようにお考えですか？ 僕自身、その論文を読んだ時は率直に「許せない」と思いました。「声」がなかったことにされる。共同作業所での「ああ、うう」という声はある分析者にとって単なる音にすぎないかもしれない。しかしそれは何かを訴える声かもしれない。何かを訴えている声は聞き取れないからカットしたが、さまざまな細かい部分まで記述した」ことは、本末転倒としか言いようがないです。あまりにも厳密すぎて、逆に一番重要な部分を抜け落ちているところがあるような気がします。好井先生はそこを本で批判されています。『批判的エスノメソドロジーの語り』（せりか書房、1999年）に入っています。彼自身はエスノメソドロジストのワークの問題として批判を加えているのですが、僕自身の

言葉で言いますと「いくら厳密にしようと思っても、自らのフレーム内で処理できるように現実を加工している」ということです。エスノメソドロギーも一つのもの見方にすぎないのですが、もの見方によって、一生懸命記述をしようとしても自らのフレームでもって処理できる、そういう限界がある。「見えないものは見えない、見えるものだけを現実として加工している」ということです。つまり、いくら科学的であっても現実の記述においては、「私たち」という一枚岩にはならないんですね。

今回、キーワードとして「加工」という言葉をシンポジウムで使っています。僕の中での重要な概念です。何をどのような手法を用いて記述しようとしても、その人の都合のいいように「加工」しているのではないか。それなら「どういうふうに加工しました」という部分をしっかりと書いた方が読み手にとって真摯な態度ではないかという気がしています。「そこまで裏舞台を書くか。過剰すぎるのではないか」という批判を受けていますが、「僕はこういうふうに加工しました。違う言い方は確実にあります」ということを「もう一つの物語」まで添えたりして出しています。確信犯的に僕自身は書いてきました。それは認められなかったんですが、最近では好意的に見てくださる方が多いようです。

この頃、フィールドワーク流行りで「猫も杓子もフィールドワーク」という言葉が本の帯に出るくらいです。佐藤郁哉先生が学会でかつておっしゃっていました。「猫も杓子もやってるなら皆やってるはず」と。杓子がフィールドワークをやってるなら僕も見たいです。まだまだ少ないです。猫はやってるかもしれませんが。フィールドワーク流行りだと言われますが、一部分です。

テーマの「フィールドワークでの〈声〉をどのように聞くのか——加工以前の現場研究覚え書き」に合わせますと、記述される現実があります。それは調査者もしくはフィールドワークワーカーの興味関心、その人の世の中、社会を見る枠組みが反映されてしまう危険性があるということです。ならば、聞こえてこない声や、聞けない声も生じることを指摘しておきたいと思います。

草山さんからほめ殺しされた「外国籍園児のカテゴリー化実践」。デビュー作です。この論文を読んで「こんなのありか。俺もやろう」と草山さんがおっしゃってくださったのは涙が出るほどうれしい。書いてよかったなと思います。デビュー作

なので思い入れがあります。

問題は昼食時の出来事です。一人の女の子が「朝鮮人だ」とカミングアウトしている。仲の良い友だちは朝鮮人だということは知っているが、その意味がわからないので「その地域に住んでいる人たちのことを朝鮮人だ」と勘違いしていた。単にそれだけのエピソードです。僕自身は、「在日朝鮮人」という言葉を使うんですが、既存の在日朝鮮人研究の枠組みの中でやっていたとすると、この場面はおそらく見えなかったと思います。単に取るに足らない、食事中の子どもが間違っただんたというくらいで、気にも止めなかったと思います。かつての在日朝鮮人研究のようなものに批判的で始めたということもあります。大阪府八尾市で生まれ育って、大阪府の中でいたとしたら、同じく見えなかったと思います。大学から北海道に移ってきたんですが、北海道の中で大阪の「在日」との関係を相対化することができたのではないかと思っています。

自分自身の暮らしている生活の場、生まれ育った場所、家庭も突き詰めて相対化しないと見えなくなってしまうことがあります。人との関係やフィールドワークにおいて、かなり重要ではないかと思っています。それをどれだけ相対化できているかによって、見えることと見えないこと、聞こえてくることと聞こえてこないことが生じてくるように思います。フィールドワークで頑張ろうという人に対して、めげるような話をしたかもしれません。これからチアアップしたいと思いますが、サトウタツヤさんも先ほど「まず褒めること」と話されました。「フィールドに立つ」ということで、自分自身が、また自分自身が持っていたこれまでの枠組みが壊されることはよくあるわけです。壊されること自体が醍醐味であり、自分の価値観、フレームワークが壊される。それも今まで生きてきた中身、生まれや育ってきた家庭やさまざまな地域、学校もすべて相対化できるきっかけになると思います。「そういうのを相対化していないから、私はフィールドワークできない」なんて思わずにフィールドワークを続けていく。それは「自分壊し、自分づくり」につながっていくわけですから、めげないで、どんどん出ていって頑張ってもらいたいと思います。

(指定討論)

斎藤 では、続きまして、指定討論に移りたいと思います。まずは岡本先生、よろしくをお願いします。

岡本 心理学の専門ではなく教育が専門で幼児音楽をやっています。宮内さんの「教室におけるクレーム申し立て」「外国籍園児のカテゴリー実践」を拝見しました。草山さんの論文は名古屋大学大学院の大谷先生からメーリングリストで紹介されて読ませていただきました。

読ませていただいて、また今草山さんのお話を伺って、正直申し上げて「筋が通ってないところもあるな」というのが実感です。通常の論文の形式からいえば、結論がないともいえます。つまり「この論文の中で一体、何が言いたいのですか？」という問いかけには答えられないという弱みがあるのではないかと思います。ですから審査を経なければならない学術誌などでは通らないのではないかとも思いました。しかし必ずしも結論がなければ「論文ではない」とも言えないのではないのでしょうか。草山さんの論文を読んでいて、このような研究の仕方もありかなと思います。この研究は、一般的にみられるような、何か結論を導き出すとか、新しい理論や枠組みを作り出すとか、あるいは既存の概念のような「モノサシ」をもってフィールドに入り、その「モノサシ」でもって事象をみていくというようなものではありません。

「モノサシ」を一切持たずに、白紙の状態フィールドに入り込んだときには、洗濯機の中でかき回されるような状態になったり、対象に取り込まれていって、ぐちゃぐちゃになってパニックになったりして「私はこの研究の中で一体何を言いたかったんだろう。だから何なの？」と論文を眺めても自分で常に突っ込んでしまうというようなことがしばしばあります。この論文では、「対象の中に入り込みすぎて事象の中で起こっていることが見えなくなってしまう」という、時として陥りやすいフィールドワーカーの立ち位置を、一端身を引いて、別の立ち位置から見



岡本 法子 氏

直し、そしてもう一回対象の中に入ってみるということを繰り返し行うという、フィールドワークを手法とした研究のプロセスそのものを描いているのではないかと思います。「理論と実践の乖離」ということが以前から言われていましたが、その一方で「そんなものは30年前に議論は終わってるよ」とも言われます。私は「理論と実践」という分け方は好きではなく、むしろ草山論文からみえてくる研究者の立ち位置としての「対象派とモノサシ派」というような分け方の方がなんとなく、自分の中で腑に落ちるんですね。ある方がこの「対象派とモノサシ派」という言葉を使用されていて、この分け方は面白いなと思いました。そういう意味では、草山さんも私も「対象派」という点で似ていると思います。そして宮内さんもまたある意味で「対象派」かなと思います。

お二人の論文を読んで感じたことは、まず何よりも私にとってわかりやすかったこと。わかりやすいというのはどういうことか。例えば草山さんのご研究は、幼児音楽を専門としている私とはフィールドが全然違います。マスターベーション介助とか福祉には全く縁がない別の世界ですが、でも草山論文の中には、私の研究にとっても有効な概念がたくさんあったんです。「語りたいことと語らせないこと」という概念は、インタビュアーとインタビュイーとの関係であってもそうですが、学校教育現場における教師と生徒の関係に置き換えてみても当てはまる概念だと感じました。フィールドで観察者として対象を見る時、白紙の状態で入り込んだつもりでも、自分の中にフレームワークをつくってしまうことがあります。つまり選択的に自分の「見たいもの」を自分の「見え方」で見えてしまう。それが必ずしも対象の本質を映し出しているとはいえないわけ、フィールドワーカーはそこで自分の立ち位置にぐらついてしまうことがあるんです。それを「語りたいことと語らせないこと」という概念を用いて二分化し、研究者が自分のフレームの中から見ても「語らせたかったこと」と対象が「本当に語りたかったこと」との間にズレがあるのか無いのかを考えながら、いろんな事象を見ていくことができるのではないかと思います。そのことによって再度研究者自身が拠って立っていた立ち位置を確認することもできます。

私は8月に、学会で発表した時、この概念を使わせていただきましたが、この概念を使って書くことによって自分の研究がとてもしっかりとしてわかりやすくなっ

たと思います。すぐに援用可能でした。

さらにこの論文の中で「有効打」という言葉が用いられています。人が負けそうになった時、最後のあがき、倒れそうなボクサーが一発殴るような、一発浴びせて、自分は負けているけど勝った人に対しても決定的な打撃を与えてしまうような一発というイメージですが、宮内論文の中でも「これは草山論文の中の『有効打』に匹敵するな」と思われるような部分が見られるわけです。草山さん自身は意図して書いてない、自分の感覚だけで書いていることを、読み手が深読みして用語というか、概念を他の事例の中でも当てはめて使っていく。そうしているうちに草山論文の概念がどんどんクローズアップされて、ご本人も知らないうちにすばらしいもののできあがっていく。読み手が自分の関心に引き寄せながらいろんな視点で読んでいくことができるという意味で、できあがっていない論文のよさ、ファジーな部分が逆に生きてくる。あまりにもきれいに理路整然としたものは援用しにくい部分もありますが、こういう論文だからこそ着目していく部分がたくさんあるのではないかと思います。

インタビュアーとインタビューされる人の関係の中で自分の揺れを見直したという意味で、研究者としての真摯な姿勢が読み取れたと思います。この論文は、そういう意味で、私たち自身が研究者としてもう一度、自分の立場を振り返るきっかけになったと思います。この会場にも自分自身の研究を振り返ることができる人はたくさんいると思いますので、草山論文はフィールドワークをやる方は読まねばならない必読論文になってしまっている。そこが面白いところです。

聞く、聞かれる側の関係についてですが、実際に教師に自分の教育や、授業についてインタビューした時、感じたことですが、ずっとインタビューしていくと、相手も教師ですから、インタビュアーである私の「語らせたいこと」が何かということがわかってくるので、微妙に自分の立場を変えていかれるんです。インタビューしている私をインタビューである教師もある意味観察していて、私の意図しているところ、私が言葉には表さないが、批判的に感じていることも敏感に感じ取られて、しゃべりながら、自分の立場を変容させていっているんです。それがインタビューしている時にはわからなかったんですが、実際にテープ起こしをして逐語録をとっていきますと、様々な箇所です教師の回答に矛盾が見えてくる。それは矛盾では

なく、私に合わせて自分の立場を変えているんだと気づきました。ある時は私が揺さぶりをかけている発言をして、それに対して先生は「これを言うとまずいわ、批判的にとられるな、批判的に書かれるぞ」と思って立場を変えて語っている。論文になることを前提にインタビューを受けていることはわかっているわけですから。相手も教育者であるということもあるのですが「これはある意味で闘いだな」と思いました。インタビューしながら互いに戦っている場面の空気というか状況をきちんと描き出すには、じっくり時間をかけて論文にしていく必要があると思います。インタビューとインタビューを受ける人の関係を意識してはいけないなと思ったので、そういう意味でも草山さんの論文は有効だと思いました。

宮内さんの論文も幼稚園をフィールドにされている、私自身の研究にも示唆を与えてくださることがあります。ご自分の立場を「これでもか」と開示していく姿勢には共感を覚えました。私自身が自分の研究の中でとても苦しんだのと同じ経験をされていると感じました。一人だけの保育者を対象にして、その先生を5年間追いつけて博士論文を書いたんです。「田舎の一人の保育者を追った論文が博士論文になるのか」と叩かれたんですが。その論文を書いている時、何に苦しんだか。二つあるんですが、一つは観察者としての自分の立場が、自分で決められないということです。保育の現場をフィールドにしていることは大きかったと思います。子どもはフィールドワーカーの立場を自分で決めさせてくれません。宮内さんもこの論文の中で、宮内先生を「先生」と規定されてしまったと書かれていますが、私も「岡本先生」と紹介されてしまったことで「先生」の側に立たされたこと。自分の立場が自分によって決められなかった。できれば見えない透明人間になりたいと思うくらい「その場に行くことによって保育の場に揺らぎが生ずる、日常の保育を邪魔しているのではないか」という苦しみがあったんですが、「子どもの生活の中の一つとしてとらえてくれたらいい。毎週1回くる岡本先生はそれが日常になっていくのだから4、5年も続けるとあたりまえになってくる」と受け入れてくださった園があったことが幸いしました。自分の立場がどんどん変わっていく。自分の中で立場が変わってはいけないのではないかと考えていたが、そうじゃないんだ。立場は変わっていいんだ。変わっていく自分をどこかで客観視して、論文に書くか書かないは別にして、自分の立場を常に意識する。どういう立場でどういう人間でいるか。

子どもたちは私にこういう発言をしたが、私が今、どういう立場なのかを意識していないといけない。揺れていく自分、揺らされていく自分もしっかりと踏まえていんだなと考えることができました。滋賀県立大学の松嶋さんも同じことを論文に書かれていて勇気づけられました。

今日のタイトルになっている「加工」という言葉にも勇気づけられました。記述は常に客観的に真実を書かなければならない。正しく見ていかなければならないと思っていた自分があったんですが、ありえないなと思っています。記述することは加工することだという概念は重要だと思います。私にとって勇気づけられた言葉でした。

齋藤 では、続きまして尾見先生、お願いします。

尾見 このシンポジウムは異色のシンポジウムだと思います。ナニワの人ばかりでついていくのが難しいなと（笑）。経歴も似ていると。僕はおハジになっているかなと。心理学をずっとやり続けているのは僕だけだ。1年間プータローをやっただけで、劇団もオペラもしてないし、心理学バカっぽい感じですね。そういう立場からのコメントになるかもしれません。これまでの議論では、心理学の近接領域の一定程度の教育を受けた人にさえ、伝わらない言葉が飛び交っている可能性がなきにしもあらずではないかと心配しています。これからのコメントもそうになってしまうかなと思いますが。論文を読まれると「あ、こういう文献をもとにしゃべっているのか」とわかっていただけるのではないかと思います。

朝、のぞみで京都に来たんなんですが、家は八王子で新横浜まで45分ですが、草山さんの論文を在来線で読んでいこうと思ったんですが、横浜線の半分も行かな



尾見 康博 氏

いうちに読み終わったんです(笑)。そのくらいスッと入って読めます。学部生の皆さんもまず読んでみていただきたい。宮内さんの方が若干難解です。

論文について若干コメントをお話できればと思います。まず草山さんについて。質的研究の特徴をおっしゃったように思いますが、「結果の曖昧さ」「ぼやっとした感じ」「何となくこんな感じだ」と。「マスタベーションの介助をすべきか否か」という問いにも「答えはない。量的研究とは違う」と。しかし見方によっては必ずしも質的か、量的かに関係ないような気がしました。量的研究でも「べき論」とか、社会に求められている「答え」、障害者に対してマスタベーションすべきかどうかというのはあるし、それを目的とする質的研究もあるし、答えを必要としない量的研究もありうるのではないかと思ったんです。それにかかわって、僕は都立大学出身ですが、そこでは、量も質もなくなって「質に対する批判は量にもあてはまるし、それほど質的研究が特殊なものではない」ということが身につについて、そういう目から見てしまう癖があって、ある種、それが武器なのかなと思っています。

「間」という言葉がありますね。どのくらいしゃべらない時間があったか。気になった言葉ですが、これもマスタベーション介助だけの話に限らない、発話障害を持っている人に限定されるわけではなく、間のとり方、間合いはインタビューする時には必ずつきまってくる。インタビュー研究をする時には常にあるのではないか。間のとり方は個人差があって、話を聞くのがうまい、下手とも関係しますが、それと別に波長のあう人、間のとり方、会話分析的にターン・テイキング、タイミングがあう人とあわない人が、同じ私でもあるわけです。修論の時も、それは立派なフィールドワークではないですが、インタビューをして何人も話を聞いていくと、どんどん話が聞ける人、どんどん湯水のように情報や語りが引き出せて、脱線だと思いながら進む場合と、5秒くらい話をして終わってしまって、どうしようかと焦ってくる人もある。「間」をじれったいと思う人と、思わない人と。「間」を埋めたくてしょうがないということもあったりするのではないかと思います。間、間合いはフィールドワークで人に話を聞く、語りを取り出す時には重要なことで鍵になるところです。聞き上手とは別に相性があるのではないかと。同じ相手でも違う。宮内さんと会ったのは2度目です。論文は読んでいたので、僕にとって活字の人だ

ったんですが、話があえばいいなと思っていました。会っていくうちに話があわなくなる場合もある。逆もある。最初は「こいつ、ゲッ」と思っていたのが話を聞くうちにテンポアップしていくこともある。臨床心理とかカウンセリングにも同形のものがあるかなと思います。

宮内さんについて。困りましたね。くだい人ですね。一人称複数形の話、僕から見ると「私たち」と書いてある論文があるの？ 僕の経験からすると受動態であることが多くて主語が欠落している、モノが主体である、現象なり概念が主体で、前段で「私たちの社会は」というのはあるけれど、受動態が能動態に変わったことが大きな変換なのではないかと思ったんですが、どうでしょう。対象が三人称というのは、人間一般みたいな、何となく人間みたいなものがあって、それが事実上、同じものとして考えられていたのではないか。特定しない、人間について。人間ガマンであったのが、その後、チャルドサイコロジーとか障害児、女性が出てきたわけですね。

質も量も同じだということについて。「量的研究は加工だ」というのはバンバン先輩からも言われていまして、それがあたりまえのようになって「こういうプロセスでいかに加工したことが大事か」と言われて、それが違和感もなくすんなり入ってしまったということがあります。量も質も共通で、加工はされている。一見、量で表示されていると金科玉条みたいで、加工してないように見えるかもしれませんが、絶対的な存在として数字が動くようなところがありますが、データを入力する段階で、すでに質問紙の言葉の段階で加工があるということが言えるのではないかと思います。

フィールドでの<声>をどのように聞くのか。どのように聞くんですかということですね。抽象的なものをポンと入れるか。相性とかプロセスに応じて変わっていくことを考えると個別的なものになってしまう可能性もある。それも大事なことであると思いますが、普段の人間関係上、人付き合いの上でやってはいけないことを学んで実践しているのと同じ程度に、大事なことがフィールドワークでもある。それ以上のことは求められるかもしれないけど、「どのように聞くのか？」「このように聞きます」というものではないのではないかと感じました。フィールドの声、私の一人称の出現が気になっていましたが、茨城大学の伊藤哲司さんと『心理学に

おけるフィールドワークの現場』という本を編んだんですが、第2部で各フィールドでの話を書いてもらうところで「フィールドと私」という節を共通させようとアイデアを出しました。うまく成功したかどうかは別にして「私がどういうものであって、私から見てこのフィールドはこうだということを表にしていけないといけない」と思っています。

最後に、本人が測定道具だとすると、測定道具を標準化しないといけないのかなんてことを考える人も出てくるかもしれません。妥当性はどうかとなると、量的研究に戻っていったりして。それは冗談ですが、そんなことになったら怖いと思っています。

齋藤 指定討論者の先生ありがとうございました。では、まず発表者の方からコメントをいただきまして、後は会場の皆さんからご意見を伺いたいと思います。

草山 両先生方、ありがとうございました。岡本さんからほめ殺しにあいまして身体中でこそばゆいです。確かに意識せずに感覚的に出している言葉がたくさんあります。「有効打」という言葉が知らないうちに一人歩きして、大谷先生、岡本先生などが面白いと。言われて

から面白いのかなど。感覚的なものでも、いい悪いは別にして出せて、他の方々の考えるきっかけになれば、自分自身も面白いかなと思っています。深読み、ありがとうございます。尾見先生、「間」ということで、僕自身、なるほどなというところがあって、意識して考えたことはないんです。間、波長、あう、あわない、これから考えていきたいと思います。質的量的研究について、結果が曖昧かどうか。量的研究を知らないで勝手な感覚的なところで見ていることをお許し願いたいと思います。「間」についてはそうか、そうなんかなと振り返りながら考えていきたいと思っています。ありがとうございました。



司会 齋藤久美子 氏

宮内 3人の共通点が言われましたが、僕も大学時代、舞台の美術を担当させていただいたことがあります。まずは尾見さんの方から。三人称について。どうしてもフィールドワークをやってくると、三人称で書けない、二人称にならざるを得ないギリギリの部分、彼、彼女と客観化できない部分が出てきます。単なる方法論ではなく、内在的にそうせざるを得ない、これ以上の記述はないということが出てきた時、二人称で書かざるを得ない部分はあるということをお伝えしたわけですね。

岡本さんに「加工」ということで勇気づけられたと褒めていただいていたのですが、僕は、岡本さんがおっしゃった「論文化は闘いだ」というメッセージが心に残りました。実際に論文に記述するのは一種の闘いなんです。筑波大学の好井裕明先生のタームを用いると「せめぎあい」ということを言われます。好井先生は差別の現場でのせめぎあいを語られるんですが、差別の現場の話だけではなく、どういう部分でも記述することは、自分自身と他者を語るということでせめぎあいなんです。その部分は安易にしてはダメだと自戒しています。本当に「闘い」という言葉がしっくりきました。

僕は、修士論文を一つも公にしていません。ライフヒストリーをうかがった方々に書いたものを見せて「取り下げてください」と言われました。「あなたはこんなに冷たい人だと思わなかった」と言われました。発達心理学会のシンポジウムでもお話ししたエピソードですが、修士論文を出すのか、出さないのか、この世界をやめるかどうか突きつけられた経験がありました。それは修士の3年の時のことです。様々な事情があって、修士論文を3本書いていますが、かなり書き直して納得していただいて修士論文を提出した思い出があります。相手との関係で、自分は引かず、なおかつ相手の要件をすべてのまず、自分を殺さず、相手を殺さず、そのようなギリギリのラインでどのような記述があるのか、「文体」ということをかなり意識して考え続けました。あれ以上ないというくらい修士3年の修士論文を出す直前は考えました。僕の文体が違うというのはそういう側面から出てきていると思います。この頃は活字にさせていただく機会が増え、かなり墮落してきたと思う部分もありますが、でもその時のギリギリの自分自身、相手とのせめぎあいのところで書いてきた、そこでの経験が今も僕を活かしてくれていると思っています。モノローグ

になってしまいました。ごめんなさい。

齋藤 会場からご質問、ご感想がありましたら。

中根 社会学研究科の院生です。宮内先生が「墮落」という言葉を使われましたが、私は常日頃から、「フィールドワーカーの寿命」について考えています。今は私はD3になってしまいましたが、マスターの頃から長く調査している団体では自分に対する扱いが変わっていることに気がつきました。最初から僕を知っている人は「若い兄ちゃんに話を聞かせてやろう」という態度なのですね。ところが僕が非常勤講師などになって曲がりにも「先生」と呼ばれるようになってきた頃にはっきりと変わってきた。最初から僕を知っている人は「先生」と僕を呼ぶんですが、やっぱり障害をもつ子どもの親って「先生」と呼ばれる人にアレルギーをもってますからちょっとちゃかして「センセー」なんですよ。でも新しく来た人はそんなこと知らないから「センセー」を「先生」と勘違いしちゃいます。そうなるともう「話を聞かせてやろう」ではなくて「子どもについての相談」にいつの間になっちゃってる。ひょっとしたら最初の頃よりいい話が聞けなくなっているのではないかと。調査と言うよりも面接をする気分になってしまう。どうやったらフィールドワーカーとしての寿命を延ばせるんでしょうか？こんなにおもしろいことやめたくないのですが・・・寿命について意識をはっきりと持っている宮内先生にお聞きしたいのですが。

宮内 痛い話ですね。僕はもうフィールドワーカーとして死んでるかもしれない。修士課程の時には、フィールドワークの場で涙ながらに「宮内君がこんな人だと思わなかった、だめだよ」と言ってくれました。今、僕に対して「それ、だめだよ」と言ってくれる人はいなくなっていると思います。もうそういうことを言ってくれないから、僕は終わっているのかもしれない。見た目が若いので20代だと思って「宮内君」と言われるのがラッキーかなと思っていますが。かなり有名な先生が自慢していました。「自分はいろんな学校に行ける。学校自身が『先生、来てください』と呼んでくれる。招かれて世界各地の学校が見える。院生はお願いしても入れ

ないから大変だね」とおっしゃったことがあります。「この人は終わっているな」。と思った経験があります。そう思った時点でだめだと思うんですね。僕はそうならないようにしたいなと思いますが、ポジション、年齢と肩書など、自分ではどうしようもない部分があります。フィールドワーカーという仕事のみをやっていくという手はあるけど、誰もお金はくれない。何かを得たら何かを引き替えに失ってしまうので、失わない前に、いい仕事をしてください。

安田 応用人間科学研究科の院生です。インタビュー調査をしました。現在、試行錯誤しながら記述し始めています。三人称で「〇さんは何々した」、あるいは、一人称で「私（筆者）にはこう思われた」という表現をよく用います。宮内先生は「三人称で書けなくなった時、ギリギリで二人称を使う」ということを仰いました。対象者とのせめぎあいにより、そう記述せざるを得なかったという印象を受けましたが、二人称で書くというのはどういう書き方なのでしょうか。一例を伺いたいと思いました。

宮内 そうせざるを得ない部分がきっと出てくるかと思うのですが。

伊藤 同じく応用人間科学研究科です。お二人の先生に今日のお話を依頼した張本人です。草山さんの論文から自分が見ている枠組み、実は枠組みの採り方がいろいろあると気がつき、「怖っ」と思ったんです。保健室で養護教諭をしています。子どもが自分のしんどさをうまく訴えられないということを養護教諭同士で意見を交流する時、「身体的経験が少なくなっているからうまく語れないのではないかと話されます。それは確かにある。経験が少ないから身体感覚とつなげて語れないことがある。それを保健室での会話分析で書けばうまく分析できるかなと思ったんですが、草山さんの論文を読んだ時、「わざと子どもが語っていない可能性もある」と思いました。いろんな見方もある。「わざと語らない」ことで子どもが「有効打」を出して、それに養護教諭が応えていなかったら、そっちの方が問題ではないかと思ったり。フレームを変えることによって論文で訴えることが違ってくる。自分がどんな立場で書けるか、どんな視点でとらえているかに自覚的にならないと

怖いことになってしまう。「ないものがある」かのように言ってしまう可能性がある。フィールドワークするのは怖いなと思ったわけです。草山さんが「語りたいたいこと語らせたいこと」を書かれ、その後、どうインタビューしていこうかと思っておられるかを伺いたいと思います。

宮内さんの論文は自分の立場で、関係性の中で書かれているところがあるように受け取りました。じゃ「自分の立場だから書ける」ものを書いていいのかなと思いました。

今日のお二人の話では、草山さんは「自分の立場に自覚的に」「関係の中で語られたことを記述する」ということを、宮内さんは「自分が育ってきたことを相対化する」「自分壊し、自分つくりだ」とお話しされました。自分の枠組みをすべて見ることはできないですが、自分の立場で語れること、関係の中でやっていくしかないのかなと感じています。「『だから』ではなく、『では』」というサトウタツヤ先生の話ともかかわってくるのかと思います。ただ自覚すればするほど臆病になってしまう自分があるので。戸惑いに何かお答えいただければと思います。

西田 社会学の博士課程を終えて博士論文を出しました。野宿している人たち二人に、5年間ほど話を聞いてそれを論文にして提出したのですが、今、じんわりと思っているのは、語ってくれたこと、引き出したデータに対して言葉をあてはめたり、何かの概念をあてはめて論文をつくってきたことがよかったのかなと。ゴッフマン、バーガーとか社会学が持っている言葉を使いながらあてはめてきた。今、考えると、5年間話してくれたこと、経験を重ねてきて、そこで見せてくれたことは社会学のこれまでの概念にあてはめてよかったのか。罪なことをしてきたのではないかという気持ちがある。草山さんは「有効打」は「これは自分の感覚ですから」とおっしゃいました。私も感覚で人の話を引き出してきました。しかし頭のこちらには社会学の概念が一杯ある。自分の感覚を信じてやりたいということもある。草山さんは本当に感覚だけでしょうか？

草山 伊藤さんが言われたこと、僕と宮内さんが似ているようで、違うと。考えたこともなかったんですが。僕の論文は僕の一つの読みであって、他にもたくさん

読みがあるだろう。いろんな読み方ができる。そのうちの一つであるというくらいしか考えていません。だからこそ怖いけど、自分の記述が唯一絶対のものではないという認識があれば、とりあえずいいかなと今の段階では考えています。フィールドワークの経験はそんなにないの。

西田さんの「感覚だけですか？」という質問。そうです、感覚だけですね。大谷先生にも言われていますが、僕のいいところでもあり超弱点は、理論体系に結び付けることができないところだと。本人も自覚しています。何年かやってもそういう方向に向いていかない。自分でわからないのかもしれませんが。感覚でしかない。だからこそ、大谷先生や岡本先生が、言葉を引き取ってくれるのかなと。変に僕が小難しい概念を出したら触りにくい部分があるかなと。これも感覚ですけど。

宮内 伊藤さんからのご質問から。私はどうしたらいいのでしょうかということですね。「そんなに自由に書けるんですか？」と逆に聞きたい。「そんなに自由には人間は書けない」と僕は思っています。自分で自由に書いていると思っていろんな影響を受けている。フィールドとの関係と指導教員、修士号、博士号を出す人たちとの関係があるので、自由には書けないと思います。実は、かなり規定されているので、そこの規定の部分が見えていないので「どうしたらいいか」という話になってくると思います。次の段階はその枠組みの中で「こんなくらいしか書けない」となってきます。そこで自分の本当に言いたいことをどうやって通していくか、文字を磨いていく。概念、理論を磨いていくという段階に入るのかなと。何を僕は偉そうなことを言ってるんでしょうね、いやになってきました(笑)。それはかなり自由ではないと僕は思うんですけど、自分の体験から、こう考えるのかもしれませんが。

岡本 前回、伊藤さん、安田さんの修士論文の中間発表を聞かせていただいたので、私の思いですが、とりあえず書いてしまったらいいんじゃないか。批判も受けると思うけど、問題点も書いてしまわないと見えない。書いて失敗するのもOKかな。それで修士号をもらえたらラッキーだと。そうしないと「出さないでおこう」という方向になってしまう。それで1年間、手をつけられず、潜ってしまった経験があ

るのです。産み落としてしまって、今の自分の立場で、能力で、先生の指導で、制限の中で、学部を出たい、修士号をほしいということで書いて、後からもう一度「違うな」と悩む。修士論文まではそれで許せますよね。後で欠点を見直す。「こういうところでミスったな」と自覚的になればいいのではないかと思います。とにかく書いてみることからしか、第一作目は始まらないと思います。

斎藤 では、最後に企画のサトウタツヤさんから一言。

サトウ みなさま、本日はありがとうございました。論じきれないこともあると思うので、この続きを電子上で議論してみたらどうなるかをやってみたいと思っています。パスワードを入れて投稿して書き込み終了。違う問題を話したいということであれば新規投稿でやる。こういうものをつくってみました。この議論自体は、『プロジェクト研究シリーズ』として刊行することで、今日、ここに来なかった人にも開放しようと思います。ただし、それはライブではなくライブ盤ですので、ライブそのものは今ここにいる人しか感じられないということも知ってほしいと思います。それではこれをもちまして終了としたいと思います。ありがとうございました。